

Donne の 信 仰 詩

船 木 満 洲 夫

Helen Gardner は、17世紀の宗教詩の豊富さと多様さとともに、それぞれの詩人が個人的な性格、個人的な文体を発揮したことを論じ、そういう詩人の一人 John Donne の普遍性に注目することも忘れない。⁽¹⁾

彼の *Divine Meditations* (「聖なる瞑想」) の各篇にまず当たっておこう。
‘Thou hast made me’ (「あなたが私を作った」) で、話者は絶望と死の恐怖にとらわれているが、肉体の罪による地獄墮ちを表白しつつそのことを切実に信じているだろうか。

Despair behind, and death before doth cast
Such terror, and my feeble flesh doth waste
By sin in it, which it towards hell doth weigh.

(後方には絶望が、そして前方には死がひどい恐怖を投げかけ、私の弱い肉体は肉体の罪によって衰え、罪は肉体を地獄に押しやる)

神の許しによって天上の神を見るのならば、立ち上がる(よみがえる)ことができるのに、悪魔の誘惑は耐えられず神の恩寵を願うのみ。天上への方が地獄へと一転し、肉体の罪が敵である悪魔と重なる運び。自分ではどうにもできず神の救いも期待し得ないとあれば、どこへ向かえばよいのか。神が磁石のように自分の心を引きつけると結ばれるが、この物理的な比喩はむしろやりよりのなさをのぞかせてはいはしないか。

‘As due by many titles’ (「多くの権利によりあなたのものなのだから」) においては、自分の身を神に委ねることがどういう意味なのか全くわからない、自分を作った神がその血で自分の罪を贖ったのだが。私はあなたの子として太

陽の輝くように作られ、私はあなたの形姿、あなたの聖霊の宮というふうに、あなたのものだとなたみかけるように強調する。罪によって自分自身を裏切ったことを認めておきながら、悪魔が私を奪いとり私をさらうと不平を言うのは、神が何もしないことへの不平にちがいない。

Except thou rise and for thine own work fight,
Oh I shall soon despair...

(あなたが立ち上がり、あなた自身の作品のために戦わなければ、おお、私はじきに絶望するだろう……)

神が恵みの働きをしなかったことを踏まえて、話者は絶望しようといまいと絶望をてこに神に脅しをかける。神の愛によって選ばれるよりも悪魔の憎しみにかかることの方を恐れるのは、話者の信仰の薄さの暴露であろうし、救いを得られない罪人の弱さ、聖言である創造主との隔離を示すものであろう。

‘O might those sighs and tears’ (「おお、願わくば以前のため息や涙が」) で、ため息と涙が自分の胸と目にもどり、この今の聖なる悲しみの中で嘆き悲しもうと話者が願うのは、むかしの女遊びが無益な汚れたものであったから。

In mine idolatry what showers of rain
Mine eyes did waste! what griefs my heart did rent!
That sufferance was my sin, now I repent;
Because I did suffer I must suffer pain.

(私の色好みのために、どれほど涙の雨を私の目は浪費したことか！ どれほど悲しみが私の胸を引き裂いたことか！ あの苦しみは私の罪だった。今、私は後悔する。苦しんだために私は苦痛を受けねばならぬ)

過ぎ去った青春の生活を現在の生活と区別して、話者はむかしの涙を流そうとする。ここにはアウグスティヌスを連想しながら、むかしの自分の罪を自慢している様子も感じられ、そうとすれば嘆く罪は自己陶醉に過ぎない。酔っ払い、泥棒、好色漢、高慢な連中は、過去の喜びの思い出によって将来の災難を和らげるが、自分の悲しみは結果と原因、罰と罪であると対照をきわ立たせる。魂の問題に話者は距離をおいているようにとれる。

‘Oh my black soul!’ (「おお、私の黒く汚れた魂よ！」) では、魂は死の伝令の病気によって召喚され、外国で罪を犯し帰国する気にもなれない巡礼、あるいは死刑を宣告され絞首刑を恐れて牢獄に留まりたいと思う泥棒、そういう死を間近にしながらどうにも脱出しようのない境地にある。その魂が悔い改める運びをとる。

Yet grace, if thou repent, thou canst not lack;
But who shall give thee that grace to begin?

(だけど悔い改めるならば恵みがないはずはない。しかし悔い改めという恵みはだれが与えるのか?)

魂の悔い改めと神の恵みの間には埋めようのない間隙があり、聖なる嘆きで黒くなり罪の赤で赤くなる、つまり魂は邪魔をする肉体を除去するのでなければならぬ。キリストの血は赤いけれど赤い魂を白く染め、黒を白に変える力をもっている。こうして救い主に目を向ける以外に手だてはないことになる。「イザヤ書」(第1章18節)と関連しつつ、最後の‘white’の語がおさまりよく定着している。

‘I am a little world’ (「私は小さな世界である」) では、私の小世界に物質的な四元と天使のような靈魂とが結合されながら、黒い罪のためにその両方が死ななければならないと話者は表明する。そして天文学者や昇天し祝福された人たちに対して、私の目に涙の海(改悛の涙をもたらす天上の海の水)を注ぐように求める。

...I might
Drown my world with my weeping earnestly,
Or wash it if it must be drowned no more.

(私は本気に泣くことで私の世界を溺れ死なせるか、あるいはもはや溺れ死ぬことがあり得ないなら洗い清められよう)

「創世紀」(第9章11節)の洪水が念頭にある。ところが私の世界は焼かれねばならないのであり、これまでのような情欲と嫉妬の火ではなくて、あなたとあなたの家への熱望(「ヨハネ伝」第9章11節と関連あり)、つまり焼いて癒す火

で自分を焼くよう主イエスに願う。現世の火から天上の火への転換にあるべき方向が示され、話者が受け身の立場であることが注目されよう。

‘This is my play’s last scene’（「これこそ私の芝居の最後の場面だ」）においては、話者は天が定めた巡礼の旅、その最後の競争をしている。死が迫っているのであり、死の床にある話者は最後の歩みだということを重ね重ね強調する（最終行まで〔1〕音がひびく）。いずれ死が自分の肉体と魂を分離し墓の下で暫時眠るが、絶えず目覚めている魂はキリストの顔を見て恐怖の戦慄に襲われる。そのとき最後の審判によって魂は天に飛び肉体は地に住み、自分の罪は当然の報いとして地獄へ押しやられることになる。話者は果たして地獄を恐れているのだろうか。

Impute me righteous, thus purged of evil,
For thus I leave the world, the flesh, and devil.

（このように悪を清めた私を正しいと考えてください。このように世界も肉体も悪魔も捨てるのですから）

改悛によって罪が清められた後も魂に帰属する原罪は残るので、キリストに正しさを認めてもらう必要があると解せる。役者が舞台から去るようなニュアンスでこの世の罪惡から逃れようとするのは、詩と神学をもてあそぶものととれるかもしれない。

‘At the round earth’s imagined corners’（「まるい地球の想像上の四隅に立って」）の表題の出典は「ヨハネ黙示録」（第7章1節）。らっぱによって死からよみがえるのは「コリント前書」（第15章52節）。この世の終わりには死者の魂は目覚める必要があり、しかも地上に散らばったそれぞれの肉体のところにもどるべきだと話者は考える。洪水、火、あるいは絶望によって滅ぼされた者、さらには神を見て死の悲しみを味わうことのない者 — 典拠は「ルカ伝」（第9章27節） —、死に方の別はあってもすべての者がそうせねばならない。ところが彼らを暫時眠らせて自分に嘆かせてくれと主イエスに願うのは、自分の嘆きは現世にこそ意味をもつと話者はとらえているのだ。

For, if above all these, my sins abound,

'Tis late to ask abundance of thy grace,
When we are there; here on this lowly ground,
Teach me how to repent...

（もしもこれらの人たち以上に私の罪が多ければ、あちらに着いてからではたくさんのあなたの恵みを乞うには遅過ぎるから。この低い地上で改悛のしかたを教えてください）

最後の審判において予定説を容れずに罪人としての改悛を選び、キリストの贖いの血で自分の許しが認定される道を話者はとる。どこまでもこの世で悔い改めることがポイント。

'If faithful souls be alike glorified'（「もし信心深い魂が天使と同じように栄光を受けるならば」）では、天使のように直観的に把握するならば、私の父の魂は私が果敢に地獄の口をまたぐのを知るだろう、しかしこれらの魂が間接的に私たちの心の外観を推論するのならば、天上で私の「心の白い真実」、真摯な意図が試されることはないだろうと話者は述べる。恋人を偶像視する汚れた恋人らが嘆き悲しみ、神を昌瀆する魔術師らがイエスの名を呼び立て、パリサイ人のような偽善者らが信仰を装うのを目にとめることになる、というふうに虚偽の信仰を羅列的に難じる。

Then turn
O pensive soul, to God, for he knows best
Thy true grief, for he put it in my breast.

（そうならば、おお、憂いに沈んだ魂よ、神に頼りなさい。神が最もよくおまえの悲しみを知っている、神がそれを私の胸の中に入れたのだから）

最後は唯一の聞き手である神の理解と神の定めの方に向かうのだが、このように魂を引き離して話者はどうなるのだろうか。

'If poisonous minerals'（「もしも有毒な鉱泉が」）は、神の命令に背いて善悪を知る木から実を食べたため — 「創世紀」（第2章17節 — 不滅の人間に死がもちこまれた、と初めは穏やかだが全体的に神に反抗する篇。自分の内面の意志や理性が罪をよりひどくし、慈悲と栄光の神であるのにどうして怒り脅かすのか、と言う。

But who am I, that dare dispute with thee
O God? Oh! of thine only worthy blood,
And my tears, make a heavenly lethean flood,
And drown in it my sin's black memory.

(しかし、おお神よ、あなたと敢て論争する私は何者だろうか？ おお！
唯一それをするに値するあなたの血と私の涙とで、天の忘却のレーテの流れを作り、そしてその中に私の罪の黒い記憶を沈めてください)

ところが最後は罪を忘れてくださるなら慈悲だと思ふ、と — 「エレミヤ書」
(第31章34節)。神は忘れても自分は忘れるはずはないし、忘れるべきでもないであろう。内面重視がきわ立つ。

‘Death be not proud’ (「死よおごるなかれ」) はどうか。おまえが滅ぼす者は死なずこの私も殺せない。そうと見える死の休息と眠りから快樂が得られるし、早いのが喜ばれる死は骨の休息と魂の解放になる。絶望や病氣やさまざまな場合があるが、所詮は眠りなのだから得意になって威張ることはない、と肉体と魂とを分離して死に話しかける。

One short sleep past, we wake eternally,
And death shall be no more, Death thou shalt die.

(短い一眠りが過ぎると私たちは永遠に目覚める。そして死はもはやなくなる、死よ、おまえが死ぬのだ)

最後の審判までの眠りのあとは永遠の目覚めなのであり、地獄か天国かは問題にされない。最終の敵である死が減び敗北する — 「コリント前書」(第15章26, 54節)。終わりのはずの死の消滅が巧みな言葉遊びで扱われている。

‘Spit in my face ye Jews’ (「顔につばを吐きかけてくれ、ユダヤ人らよ」)
は次のように始まる —

Spit in my face ye Jews, and pierce my side,
Buffet, and scoff, scourge, and crucify me,
For I have sinned, and sinned, and only he,
Who could do no iniquity, hath died.

（顔につばを吐きかけてくれ、ユダヤ人らよ、脇腹を刺し殴打し嘲弄しむち打ちはりつけにしてくれ。私は繰り返し罪を犯してきたのに、どんな不正もなし得ないあの方だけが死んだのだから）

被虐性の表現、自分の罪とキリストの死との対比、そして ‘crucify’ の語が注意をひく。「マタイ伝」（第26章67節、第27章22節以下）との連関から始まって、8行目で見事な1行に結晶する — ‘Crucify him daily, being now glorified’（今や栄光の境位にあるキリストを毎日十字架にかける） — 「ヘブル書」（第6章6節）。自らそれと知りながら、気の向くまま新たに罪を犯すのだ。私たちのために私たちの罪を贖ったキリストの愛が、「創世記」（第27章）のヤコブと兄エサウの物語と結びつき、最後は神が賤しい人間の肉を身にまとい、自ら望んで苦しみを受けたことが称えられる。

‘Why are we by all creatures waited on?’（「なぜわれわれはあらゆる被造物に奉仕されるのか？」）は、「詩篇」（第8章5—8節）と関係する。被造物は私よりも純粹ではるかに腐敗していないのに、どうしてわれわれに仕えるのか？ 動物たちはどうして服従に耐え、どうしておとなしく弱さを装って罪ある人間の一撃で死ぬのか、人間全部を餌食とすることもできるのに？ 悲しいことに私はおまえたちより弱く悪い、おまえたちは罪を犯すこともないしこわがる必要はない。このように動物と人間を対比した上で —

But wonder at a greater wonder, for to us
Created nature doth these things subdue,
But their Creator, whom sin, nor nature tied,
For us, his creatures, and his foes, hath died.

（しかしより大きな驚異を見て驚け。創造された自然はこれらのものをわれわれに屈従させるが、しかし創造主は罪を超越し自然の理にも制限されないのに、被造物であり敵であるわれわれのために死んだのだ）

人間に仕える被造物から、身を落としてどこまでも人間に奉仕する創造主（神、キリスト）に話が移り、逆説の論法でその贖罪の死が強調される。

‘What if this present were the world’s last night?’（「今夜が世界の最後の

夜であっても何であろう？」) の冒頭は次の通り —

What if this present were the world's last night,
Mark in my heart, O soul, where thou dost dwell,
The picture of Christ crucified, and tell
Whether that countenance can thee affright.

(今夜が世界の最後の夜であっても何であろう？ おお魂よ、おまえが住む、また十字架にかけられたキリストの姿がある私の心の中を見たまえ。そしてその顔つきがおまえを恐れさせるものかどうか告げよ)

最後の審判は永遠に通じる。話者は自分の魂に呼びかけながら、十字架上の苦しむキリストに想像を向ける。贖いの涙と血、そして敵のために許しを乞うた舌 — 「ルカ伝」(第23章34節) — に言及する。むかし女の偶像にうつつをぬかしたように、キリストの美しい形姿は優しい心を保証する、というように世俗と神聖をパロディ化して救済に結びつける。

‘Batter my heart, three-personed God’ (「私の心を打ちすえたまえ、三位一体の神よ」) では、聖書的連関をもたせながら、話者は自分が立ち上がれるようキリスト教的に作り変えることを神に乞い願う。人間には抵抗不可能な神意が自分の自由を侵害し、自分が神のものとなるよう暴力を加えてくれることを望む。神を受け容れようとしてもできないのは、私の理性がとらえられていて弱く不実だから。私は心からあなたを愛し熱烈に愛されたいと願望している。あなたの敵(悪魔)との婚約を廃棄しその絆を断ち切り、私をあなたの牢獄に閉じこめてもらいたいと話者は求める。

Take me to you, imprison me, for I
Except you enthrall me, never shall be free,
Nor ever chaste, except you ravish me.

(私を連れて行って監禁したまえ。なぜなら私はあなたが奴隷にしなければ自由ではあり得ず、あなたが凌辱しなければ純潔ではあり得ないから)

この有名な逆説の結びは、話者には救済があり得ないことをほのめかすであろうか。極端な受け身に位置して神に凌辱されることが、悪魔から解き放たれる

唯一の手段であり、完全に神のものになることが純粹理念として貴重である趣意は明白。

‘Wilt thou love God, as he thee?’ (「神がおまえを愛するように、おまえは神を愛そうと思うか?」) は、表題自体実現し得ない望みだ。「健全な瞑想」が主題として明示されている。霊なる神は天では天使たちに仕えられていたが、それがおまえの胸の中の聖霊の宮—「コリント前書」(第6章19節)—に住んでいる、と話者は魂に語りかける。

The Father having begot a Son most blessed,
And still begetting, (for he ne'er begun)
Hath deigned to choose thee by adoption,
Coheir to his glory, and Sabbath's endless rest.

(父なる神は最も祝福された御子を生み、そして今なお生みつつあり — 御子には初めはない —、おまえを養子として選びたまい、その栄光と、安息日の永遠の安らぎを継ぐ共同相続人とした)

初めと終わりのある時間を超えて、贖いのために神の子の化身を永遠に生みつけ、魂の共同相続人としたのだ — 「ロマ書」(第8章17節)。泥棒にあった者が、盗品が売られているのを見出したときの法律を引き合いに出し、それと同じようにキリストは、その所有物である人間を悪魔からとりもどすために、死の償いをしなければならない(つまりキリストは泥棒の被害者で悪魔が泥棒。ダン流の遊び)。神が人を自らの姿に作った — 「創世記」(第1章27節)、「ロマ書」(第8章29節) — だけでなく、神が人の姿になった — 「ピリピ書」(第2章7節) — というふうに人と神の位置を逆転する。話者はキリストの化身に対して冷静に頭を働かしながら、墮罪が神の愛の例証をよび起こした点で幸いであったことをほのめかしている。

‘Father, part of his double interest’ (「父よ、あなたの御子の二重の権利の一部を」) では、その一部を御子は「私に与え」、理解し難い三位一体における共有権は自らのもとにとどめて、その死によって得たものを「私に与えている」、と話者は述べる。死ぬことによってこの世に生命を恵んだこの小羊キリストは、この世の初めから屠られていたので — 「ヨハネ黙示録」(第13章8

節) — 二冊の遺書、つまり旧・新約聖書を残し、その王国の遺産をあなたの子らに付与する、と。しかしあなたの戒律は厳しいから、人間が守れるかどうか今なお議論される。それはだれにも果たせないが、すべてを癒す恵みと霊が、旧約の法律と文字によれば死に値するのに、キリストのこの遺産で生命をよみがえらせてくれる — 「コリント後書」(第3章6節)。

Thy law's abridgement, and thy last command
Is all but love; oh let that last will stand!

(あなたの法律の要約、そしてあなたの最後の命令はただ愛することである。おお、この最後の遺言が支持されるように！)

新しい掟としてキリストは互いに愛すべしとつけ加えた — 「ヨハネ伝」(第13章34節)。これはわれわれの救済が旧約の正義ではなく、新約の愛に基づくべきことを示すであろう。

‘Since she whom I loved’ (「私が愛した彼女は」)はどういう篇か。Donneの妻 Ann は1617年に33歳で亡くなった。自然に借りを返したのであり、詩人は人間の運命を痛感せざるを得ない。彼女の魂が天国に奪い去られ(救済され)、自分の心は専ら天国に向けられる。現世では、称賛すべき彼女に憧れることが神なるあなたを求めるようにしむけ、あなたを見出して私の渴きは癒されたが、私のさらなる恵みを求める渴望は飽くことを知らない。

But why should I beg more love, when as thou
Dost woo my soul for hers; offering all thine.

(しかしさらに愛を乞い求める必要があろうか、あなたが彼女の魂に代わって私の魂を口説き、あなたのすべてをくださるのに)

二人の魂は天国で再び結びつき、あなたはあなたの独り子キリストを提供するのに、理に合わないことではないか、というわけ。そして聖者や天使などに私の愛が向けられることをあなたは恐れ、また現世、肉体、さらには悪魔に私がそそのかされて、あなたが排除されるのではないかとあなたはうたぐっている、と詩人は現世愛の側に立ちながらなんとも暗い結びで終える。

‘Show me dear Christ’ (「愛するキリストよ、私に見せてください」)は論

議の多い篇。冒頭の行から「ヨハネ黙示録」(第19章7—8節)、その他新約のいくつかの箇所と関わる。‘richly painted’はローマ・カトリック教会、そして‘robbed and tore’はプロテスタント教会を指すが、Donneにとってはどちらの教会に与するかの問題ではなく、聖書の教会と現実の教会を対比して、現実のいずれの宗派の教会もキリストの真の花嫁と言えるかどうかに関心事だ。そういう観点から教会批判を連発し、モリアの山、ローマ、それともジュネーブに属するのか、あるいは旅をする騎士のように花嫁を愛すべきなのか(スเปนサーと関連あり)と疑問を出す。

Betray kind husband thy spouse to our sights,
And let mine amorous soul court thy mild dove,
Who is most true, and pleasing to thee, then
When she is embraced and open to most men.

(やさしい夫よ、あなたの花嫁を私たちの見えるところにお示してください。そして私の恋する魂があなたの柔和な鳩に求愛するようにさせてください。あなたにとって彼女が最も貞節で好ましいのは、最も多くの人に容れられ露わにされるときです)

鳩は「雅歌」(第5章2節)が典拠。キリストが花嫁(教会)に最も満足するのは、花嫁が最も多くの男に性的に役立つときだ、と話者は最後に主張する。天上の愛を地上の性的な愛に移し変えるのは、キリスト教の普遍性に対して衝撃的に皮肉ったものか。

‘Oh, to vex me’ (「おお、私を悩ますために」)はこう始まる —

Oh, to vex me, contraries meet in one:
Inconstancy unnaturally hath begot
A constant habit; that when I would not
I change in vows, and in devotion.

(おお、私を悩ますために、相反するものが一つに合わさる。移り気が不自然なことに変わらない気性を生む。そのため、望まないのに私は恋の誓いも神への信心も変化する)

この詩では最後まで‘I’を執拗に通し、そして逆説的な対照表現が用いられ

る。このあと‘as’の連発によって、宗教的な悔悟と世俗的な愛を対比させ、謎のように不安定な立場を表明する。神への対し方も一日一日異なり、宗教的な発作は気まぐれな熱病のように時間性をもつのに、恐れおののく日が最良の日だと話者は結ぶ。この宗教性を暗示する逆転と調和は、論法として文字通りにはとれないのではないか。話者は意識して背反する現実の両面を提示し、自らは一方に片寄らない距離を保っているように思える。

*

*

*

La Corona (「冠」) は7連のソネットから成る。各ソネットの最後の行が次のソネットの最初の行に反復され、最後のソネットの最終行が最初のソネットの冒頭の行と同じになって、「コロナ」の円環が完結する。個人的な詩のようであっても話者は虚構のスタンスを保ちながら、‘crown’や‘end’の語呂合わせや逆説の表現で救済の主題と結びつける。黙想と祈禱の手法も含む。題名が「イザヤ書」(第28章5節)に基づくだけでなく、全体に旧・新約の聖書的連関に満ちている。

A Litany (「連禱」) は28連(各連9行)から成る長詩で、霊的なものから世俗的な関心まで多様にわたる。詩人はその一方に片寄ることは避けている。以前のようなシニシズムも懷疑も見られず、むしろキリストの生涯に目を向けている。⁽²⁾ 個人的な詩の形式をとりながら、話者の唐突や尊大さが読みとれ、自分をキリスト同様に十字架にかけて再生し得よう天の神に求める Donne 流の叙述に、黙想とコンシートの手法がきわ立っている。キリスト教の教義の提示よりも誘惑からの救済に詩人の関心があり、来世志向の要素が濃厚であっても、Donne は必ずしも現世からの離脱はできないで、現世と来世との間の揺れ動きに彼の宗教詩のドラマが存する。⁽³⁾ 祈願の詩だけあって、キリストよりも話者の側に力点がおかれているとも言えるし、技法の観点から見ると、全般から特殊へ、⁽⁴⁾ 客体から主体へ、外面から内面へ場面が移り変わる(時には逆の場合もあるが)。⁽⁵⁾

The Cross (「十字架」) は、当時の議論と関連しているようだが、詩人はいずれかに与することは避け、ピューリタン批判を含め彼なりのいくつもの論議が並行している。キリストの磔刑に関わる‘image’‘altar’さらには‘crucifix’

等の語が、救済に通じる自己犠牲、あるいは苦しみと殉教というテーマと結びつく。

Good Friday, 1613. Riding Westward (「聖金曜日・1613. 西に旅して」) は、Donneらしい評判の作品。キリスト、自己犠牲あるいは慈悲を扱い、現実よりは技巧と想像の次元で筆をすすめる逆説にも富んでいる。

A Hymn to Christ, at the Author's last going into Germany (「キリストへの賛歌 — 作者の最後のドイツ訪問に際して」) は、Donneの賛歌のうちで最も早く書かれた作品。話者は現世を放棄してキリストの水で現世の罪を洗い清めようとする。「神と魂の間を往き来する愛をテーマにした彼の最もすぐれた詩」と評される。⁽⁶⁾キリストの贖いの血その他のテーマがすぐ変わるし、個人的感情はこもっていても詩人のポーズの方が目だつように思える。

Hymn to God my God, in my Sickness (「病気の床からわが神に捧げる賛歌」) は、Donneの死の準備の作品。「宗教詩におけるDonneの最も顕著な業績」と評されると同時に自己劇化が指摘される。⁽⁷⁾話者は地図となり癒す者たちは宇宙地理学者となるが、自らの魂の準備をしながら聖職者の役目にもどる。苦しみという逆説によって、神は人間という小世界で墮罪と復活を結合するのであり、「詩篇」第62や第116の神あるいは主の救いにつながる。詩人は死の床にあって長年の若さを失わない。

A Hymn to God the Father (「父なる神への賛歌」) は、「ロマ書」(第6章23節)における罪の死とキリストによる救済をテーマとし、話者の信じる原罪の概念が提示される。言葉遊びと論理は必ずしも納得させるものではないであろうが、自己不信と神の慈悲の光を伝え、個人の罪を強調している点が注目をひく。

Donneの信仰詩は聖書の連関に富むとともに、宗教性と世俗性の対照に特徴がある。創造主(神、キリスト)の慈悲と贖いを取り上げながら、創造主との間には埋め難い隔たりがある。話者は魂もしくは死、さらには罪と改悛と救済に焦点をあてながら、魂を自分から切り離して絶えずスタンスを保ち、自らを別の受け身の位置においている。現実重視と現実批判の姿勢が目立ち、手法

上は逆説，コンシート，語呂合わせ，アイロニーを詩人なりに奔放に駆使している。

本稿のために使用した詩集は次の通り。

John Donne: The Complete English Poems, edited by A. J. Smith (Penguin Classics)

註

- (1) Helen Gerdner, *Religion and Literature* (Faber and Faber, 1971), pp. 171—3, 189, 191.
- (2) W. R. Mueller, *John Donne: Preacher* (Princeton University Press, 1962), p. 18.
- (3) J. B. Leishman, *The Monarch of Wit: An Analytical and Comparative Study of the Poetry of John Donne* (Hutchinson & CO. LTD, 1965), pp. 260—1.
- (4) Anthony Low, *Love's Architecture: Devotional Modes in Seventeenth-Century English Poetry* (New York University Press, 1978), p. 57.
- (5) *Ibid.*, p. 63.
- (6) *Ibid.*, p. 78.
- (7) Clay Hunt, *Donne's Poetry: Essays in Literary Analysis* (Yale University Press, 1962), p. 96. 本書にはこの作品に関する細かい分析がある (pp. 96—117)。

※ なお拙稿は下記に負うところが少なくない。

P. M. Oliver, *Donne's Religious Writing: A Discourse of Feigned Devotion* (Longman LTD, 1997).

〔追記〕 Donne の信仰詩を読んでいると中世の Meister Eckhart の著述を想起することがあるが、Eckhart はむしろ Henry Vaughan にこそ深い関係をもつ（特に *The Night* に著しい）ことを指摘しておきたい。